○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

おはようございます。きょうは早朝から、また寒い中、多くの傍聴者の皆さん、本当にありがとうございます。

年頭でございますので、一言ごあいさつ申し上げたいと思います。

傍聴者の皆さん、市民の皆さん、明けましておめでとうございます。平成21年の新しい幕あけがすばらしい雪景色の中で始まったわけでございますけれども、傍聴者の皆さんや市民の皆さん方には、さわやかな気持ちで新春をお迎えになられたことと、心からお祝いと、そしてまたお喜び申し上げる次第でございます。

また昨年、本当にいろいろとありがとうございました。本年も私は医療のまち武雄市、福祉のまち武雄市をつくるため、精いっぱい頑張りたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

それでは、早速一般質問に入りますけれども、まず第１番目の項目、公職選挙法違反につきましてですけれども、正月でございますので、これは今回は省いていきたいと思います。

まず、市民病院問題について質問をいたしてまいりたいと思います。

振り返ってみますと、昨年は日本全国で公立病院のあり方について、経営形態のあり方について大きくクローズアップされた年であります。テレビや新聞などで報道されたわけでございますけれども、まだかなりの人がいろんな部分について疑問を持っておられると思っているところでございます。

言うまでもなく、新医師臨床研修制度は、厚生労働省が積年の望み、長年の願望がかなったところであります。これは、とにかく研修医を大学から引き離す、医局が医師の手配をするような、そういう制度はなくすと。また、大学病院には本来の姿、つまり学問研究を主体とした病院につくり変える、そういう考え方でありますし、また、医師は専門家になるよりも、すべての部門で活躍できる、そういう医師を育てると。そのような厚生労働省の願望から、２年間の研修が義務づけられたところであります。

それはなぜか。それは、厚生労働省は大病院、中小病院、専門医院、診療所などの診療内容を区分けすることで患者の重複診療を防ぎ、医療費の抑制を進めようと、そういうねらいからであります。このことで、つまりこの制度で厚生労働省のねらいどおり、大学病院へは医師が集まらなくなり、大学病院へ医師の派遣を依頼しているどこの自治体病院も、公立病院も勤務医不足になったところであります。

また、財政赤字問題も大きくクローズアップされたところでありますが、その背景には、財政健全化法の中に連結赤字比率が網羅されたのが大きな一つの原因であります。また、北海道夕張市の財政破綻問題から、金融庁が金融機関に対し、地方自治体への一時借入金融資を見直すように指導したことによって、これまでは自治体の保証があればほぼ無条件で借り入れができていたものが、内容によっては融資の拒絶に遭うため、どこの自治体も真剣に赤

字解消に走ったからであります。現実に宮城県石巻市の公立深谷病院は、一時借入金の借入先である銀行から融資を断られて、そして経営破綻したことは周知のとおりであります。自治体病院は絶対つぶれない、公立病院は絶対つぶれないという神話が崩れたのであります。

我が武雄市においても、昨年、民間移譲の是非についての市長選挙が行われ、民間移譲することに多数の民意を得たところであります。反対派の方もこれで民意に従ってもらえるものと信じているところであります。

ここで、市長にお伺いしますが、今度新しく市長に当選されて、市民病院問題で私たち市民へどのような希望を与えてもらえるのか。どのような夢を与えてもらえるのか。

あわせて、今回の選挙で一番感じたことは、市民の皆さんは何を信じて、どのような情報を信じていいかわからない、その声が一番多かったということであります。選挙は政策対政策が大前提であります。医療費が高くなるとか、国保税が高くなるとか、患者の囲い込み、振るい落としをするなどなどさまざまなうわさがはんらんし、多くの市民の皆様がいまだに不安に思われております。私が近くに、私たちのまちに、市にどんなに大きな病院が建っても、どんなに立派な病院が建っても、決して医療費や国保税は高くならない、どんなに力説してもなかなか聞いてもらえなかったわけであります。

そこで、当選後の市長の仕事は、まず市民の皆さんのそういう不安を取り除いてやること、市民の皆さん方のそういう不安を取り除いてやること、これが一番の仕事だと思います。そのためにはちゃんとした情報、正確な情報、公としての情報、そういうものを市民の皆さんに場所を設けて説明してあげるべきだと思いますが、いかがでしょうか。樋渡市長の市民病院問題に対する抱負と見解を簡潔にお願いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

御答弁申し上げます。

まず、市民病院について今後の希望でございますけれども、これは一番大きな問題であると思います。24時間365日の医療、そして特に高齢者の皆様方に心優しいというか、そういった医療をきちんと提供できるという意味で、この医療が途切れることなく継続ができるということについて、本当に市民の皆様方に深い御理解をいただいたことについて、この場をかりて御礼を申し上げたいと思っております。

しかしながら、一方で選挙戦のときにさまざまなことが言われました。医療費が上がるとか、国保税が高くなるとか、事実無根のことを言われ、それを患者様、あるいは市民の皆様から言われたことは、これは事実であります。そういったことで、私にとりましても説明不足だったということは、それはもう率直に認めたいと思いますので、今後そうならないように、きちんと公の説明会の場をふやす、あるいは市報、広報等できちんと正確な公正中立な

情報を提供する、そういったことが今私に求められていると、このように考えております。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

市長、これは今回の武雄市長の選挙公報なんですね。（資料を示す）ここに「脱派閥」と書いてあるんですね。派閥があるんだという裏返しですね。

実は、合併する前に武雄市は政争のまちだとよく聞きました。私はそれだけ政策論争が激しいまちだと思いましたけれども、今回の選挙で派閥のぶつかり合い、そういうのをまざまざと感じたわけでございますけれども、先日、テレビで派閥における選挙は怨念を生む、憎しみを積み重ねる、そういう話がされていたわけでございますけれども、市長、ぜひ派閥のない明るいまちづくりが必要だと思うんですね。政局から政策といいますかね、ぜひ派閥のない武雄市をつくるべきだと思いますけれども、御答弁をお願いします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

このことについても、選挙戦のときに本当に深く思い至ったわけであります。私も一身をなげうって派閥解消に向けて努力をしたいと、このように考えております。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今回の選挙の争点はだれでもわかるように、本来は民間移譲に賛成か反対か、これが争点だったと思うんですね。私は前にも申し上げましたように、国立病院を存続するときには賛成をしましたし、署名もしました。しかし、武雄市で病院経営をするということに対しては、北方町から見たとき、反対ではなく、賛成はしませんでした。それは赤字になるからですね。そのいきさつを、市長いいでしょうか、９月議会で質問していたんですね。そしたら、不当にも議長に議事進行でとめられたんですね。とめられました。だから、本日は議事録を持ってまいりました。

平成10年７月、国立療養所武雄病院移譲検討委員会会議録ですね。平成10年７月21日から平成10年７月23日です。この12ページ、富永委員ですけれども、この件で――この件とは休日急患センターなんですね。この件で医師会のほうがどがんしてでも残したいと言われれば、もう北方と山内に任せんですか。切り離しですね。武雄もそれでよかたいねと、こう言われているんですね。向こうはかたらんとやっけん。それは相談されたときですね、やはり国立としては存続させたいけれども、どうしても小さい自治体がするのは難しいということで賛

成できないというんですね。「向こうはかたらんとやっけん。この市立病院のほうには協力せんとはっきり言いよらすとやっけんと。そしたら、急患センターは山内と北方で折半であそこを借りてさせたほうが一番ようなかと、おれはそがん思うばってん」。つまり、自分たちは黒字になるから、あそこはさせていっちょけという話なんですね。

これは、さらに54ページですけれども、これも同じく富永委員です。つまり、休日急患センターと武雄市が救急医療をするもんですから、日曜日がダブるというんですね。部長の答弁ではダブってやるんだと。ダブってすれば、ここはなくなるですよと。休日急患センターはつぶれますよと言われている。ダブって日曜祭日も24時間体制で診てくれると、向こうは簡単につぶるっさい。もしそういうことであれば、休日急患センターは閉めて武雄市でしていいじゃないかと、そういう話をすべきなんですね。切り離しなんですよ。だから、それはなぜか。背景には、武雄市民病院は黒字だという情報操作があったからですね。

本題に戻りますけれども、実は一昨年12月、特別委員会をつくって、私、委員長になりましたけれども、去年の２月12日、これもここで言いましたけど、岡山県備前市のほうに行きました。それはなぜ行ったかといいますと、そこは黒字だったからです。病院が黒字だったから行きました。病院も新しく建てて、器械もいいのを入れておりました。しかし、大学病院が先ほど言いましたように医師を引き離したもんですから、医師不足になって、そこで言われたのは、病院は建てても、病院はまさにサドンデス。これはスポーツ用語でしょう、上田議員ね。まさに廃墟のまちというんですね。砂上の楼閣なんですよ。そういうのを２月12日に目の当たりにしてきたんですね。

そして、４月の委員長報告で、ここにありますけれども、私の報告ですけれども、つまり、１月11日から３月31日まで７回にわたり開催しました。この間、２月12日に行ったですね。特別委員会の目的は、市民病院の経営は財政的に厳しく、病院経営をどのような形態で行っていくかということを審査しておりましたけれどもということですね。しかし、今日での特別委員会審査は医師不足に対してどう対応するかなどの根幹的な問題に変わってきた。これは2004年から始まった新医師臨床研修制度により、自治体病院はどこも医師確保が至難のわざになってきたと。だから、医師確保の見通しが立たない今日にあっては財政問題からの経営形態は検討しかねるということで、実はさらにですけれども、もし民営化するとすれば、ちゃんとしているんですね。もし民営化するとすれば、救急医療問題、地域医療問題、看護師初め病院職員の職場安定確保がどのように変わるのか、具体的に議会に提示し直してくださいと言ったんですね。これは各社の新聞に大きく載りました。つまり、「市に改革案を提示を」、あるいはまた「医師不足対策示せ」、それから「経営改革ビジョン　委員会が武雄市に申し入れ」などなど書かれました。

そこで、結局、武雄市民病院が発足するときは、それは77.3％の方は救急病院が欲しいということで始まったんですね。だから、救急医療を再開するために、３月21日ですよ、これ

は新聞に載っておりますけれども、３月21日に市長に対して委員会は、医師会に相談をしなさい、要請をしなさいと、救急医療再開のためにですね。そしたら、３月24日の日に医師会のほうから、どこも手いっぱいであるのでだめだと断られたんですね。だから、先ほどの委員長報告になったんですよ。この事態を踏まえて、過去のことですけれども、振り返ってみて、そのときどのような考えだったのか、そのことを確認しておきたいと思いますけれども、ここから変わっていったんですね、３月８日から。ぜひ確認方をお願いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

振り返ってみますと、昨年の３月は本当にイバラの道でありました。医者がどんどん減っていくと、あるいは公立病院がもう音を立てるように全国で崩れ始めているということを見たときに、私たちにとって何ができるかといったことで、黒岩委員長から救急をまず再開してほしいと。さまざまなことがありましたけれども、まず救急を再開してほしいといったことについて、これを何とかしなければいけない。そういった意味で、私は今振り返ってみますと、あのときに特別委員会から具体的にこうしなさいといったことについて、これを何とかすれば光明が見えるといったことを今、昨日のように思い出しております。そういった意味で、特別委員会には私は本当に感謝をしております。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

そのような流れの中から、今回の選挙の争点は、先ほど言いましたように、最初は民営化問題だったんですね。民営化で戦っていたと思います。しかし、当初言いましたように、だんだんだんだん途中からやはり派閥選挙という感じがしてきたんですよね。つまり、民営化賛成派対民営化反対派の形が、いつの間にか市長派対○○派とか、市長派対反市長派とか、そういうふうな形に変わってきたんですね。

だから、これがどういうことを招くかといいますと、市民病院賛成、反対、そこの候補が出る。それで市民の皆さんに問うて賛成、反対がどこに分かれるとかなりますけれども、市民病院賛成、反対政策しながら、これが派閥になりますと上に上がっていきますので、つまり、私はこの派閥だからということで、当初は市民病院問題に賛成していても、派閥でいけば市民病院に反対の候補を推すと、そういう珍現象が生まれるんですね。そうなれば憎しみが出てくるんです、先ほど当初言いましたように。

そういう意味からも、派閥選挙はちゃんとなくしていくと。そうじゃないんだと。政策対政策ということでなければ私は武雄市の発展はないと思いますね。そういうことでぜひとも、

さらなる答弁になると思いますけれども、派閥解消しなければ武雄市の発展はない。そういう決断を持っていただきたいと思いますけれども、市長の見解をお伺いいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私は今回の選挙戦を通じて、つくづく過渡期というんでしょうか――だと思いました。今回の市長選では私も反省すべき点もあります。そういった意味で、私はその反省点というのを心の糧、市政運営の糧としながら政策運営を進めていく。そういった意味で、選挙戦がもう終わって、ラグビーでいうとノーサイドになったというふうに思っております。したがって、武雄市民のために、今回は武雄市民の医療のために一致団結できるように私自身も身を粉にしてまいりたいと、このように考えております。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、今いみじくも言われたように、派閥をなくすためには、まず市長みずからが分け隔てせずに、今もしていないと思いますけれども、分け隔てせずにやっていくと。下からはできませんので、上からちゃんと考えていくと、それが一番大事なことだと思うんですね。だから、今からが大事なことですので、ぜひそうお願いしたいと思いますね。

それで、もう少し行きますけれども、派閥選挙の怨念、執念、憎しみ、こういうことなんですね。政策対政策であれば、先ほど言いますようにすっきりするんですよね。何でか。自分たちは住民の負託を受けて出ているんですから、政策を闘って、住民の方がこっちが多いということは、そっちへ行くのは当たり前なんですね。しかし、派閥と派閥であれば憎しみが行きますので、今度は、その次はということで物すごく重なっていくんですね。

だから、政争のまちが政策のまちにぜひ武雄が変わるようにしていただきたいと思いますけど、もう少し実例を挙げますが、実はこれは12月25日、選挙期間中ですよね。これは「明るい武雄市をつくる市民の会ニュース」と。（資料を示す）まあ、部内資料ですので問題ありませんし、私は文書批判、余り思わんとですよ。政策対政策を書いて、選挙期間は配ってならんというのがありますけれども、私は政策ならある程度やっていいと思うんですね。買収はいかんけど、これはもちろん公職選挙法違反は違反でも――これじゃないですね、文書批判であっても、私は大いに政策はやってもいいと思うんですね。

しかし、私が言いたいのはこの中身ですよ。患者の嘆き、65歳。「今、市民病院で受診しています。高度医療が必要と言われ、福岡や北九州、行橋の病院へ行くように言われました。（何でそんな遠方に行かにゃならん）……」、嘆いておられます。「患者の嘆き、65歳男」と書いてありますね。「あなたや家族は福岡や北九州、行橋の病院に行きますか」と書いて

あります。「遠くなったら見舞いにも来てくれん」と書いてありますね。「池友会和白病院は、大学病院や地域病院などと連携しないで患者の囲い込みと振るい落としを行う病院です」と書いてある。それから、その下に「うそで市民をだますビラや演説、前市長は――樋渡市長ですね――前市長は、演説会では26億円にも赤字が膨らんだ」と、こう言われた26億円の根拠ですね。

この26億円については後に回しますけれども、この65歳の患者さんの嘆きというのがありましたので、市民病院に聞いたんですよ。調べてみました。おられないんですね。それはそうでしょう。65歳の方が言われて断られたから、記録が残っていないということでしょうね。本人は断られたと。断られた方は記録に載っておりませんのでね。しかし、確かにおられました。３名。３名の方が和白病院に行っているんですね。59歳男性と72歳女性。この方たちは転移性脳腫瘍のため、ガンマ線照射、ガンマ線て打つんでしょう、腫瘍にですね。事務長、そうでしょう。これは鳥栖やったですね、陽子線でがんを打つとがあるですね。あそこはたしか100億円ぐらいだったですね、がんを打つのが。もう鳥栖にできたんですかね。まだできてないですかね。１人300万円ぐらいでしょう。県も金出しておるですね。しかし、これは将来の、300万円の安い高いは別としてわかりませんけれども、がんの深いところにあるのをそこだけ切らずに打てるんですよね。銭持たんぎ、命もつかわからんですけれども、そういうため、このガンマ線照射を打っているんですね。もう一人は64歳女性ですよ。狭心症で３ＤＣＴ検査のため行かれているんですね。これは何かと聞いてみますと、心臓が立体に映るらしいですね。そういうことで検査に行かれている。３名の方がおられた。

そして聞いてみたら、基本的に医師の判断で紹介を勧めるが、患者様本人が拒絶すれば和白への紹介はしていない。当たり前のことだと思うんですね。しかし、高度な機器というんですかね――実は私、９月30日に目の手術をしたんですよ。ある病院に行って聞いたら、診察はできても、表面から見れば眼底に水がたまっていると。しかし、断層撮影しなければどこまで深いかわからんというんですね。市長、いいですか。それが佐賀県に２台しかなかった。近くの病院に行って断層撮影をしました。もしこれが武雄になくて、鹿児島にしかないといっても私は行きますね。おかげで、しばらくは左目が見えなかったんですけど、少しずつ回復して、まだ病院には通っていますけどね。そんなものだと思うんですね。

それはそれでいいといたしましても、それからもう１つ、これもですね。つまり、池友会へ委託金の500万円ですか、これは蒲池統括監の手当ではないかという話があったんですね。これは選挙のときですけれども、Ａ議員の奥さんが樋渡候補の側近にかみついたんです。市長御案内かどうかわかりませんけれども、つまり蒲池統括監は170万円の給与のほか、500万円も余計にもらっている。そんなに金を出せばどこからでも医者は集まるといってかみつかれたんですね。

私これ不思議なのは、このことは議会であれだけ論議したんですね。だから、議員の奥さ

んであれば、そこまで知っていれば、当然この金が質の高い救急医療に使われると、その計算だということは十二分に知っていたと思うんですよ。だから、派閥選挙なるがゆえに、こういう歪曲がされたんじゃないかな、悪意を持たれたんじゃないかなと思うんですよ。

８月11日から行われている救急医療は従来の医療と大きく違うんですね、救急医療が。24時間365日、すべての患者様に対して決してたらい回しをしない。そのためにはあらゆる体制が必要なんでしょう。夜中であってもＣＴ、レントゲン、血液検査などの検査技師を置いておかなければならないし、それに対応できる医者や看護師さんが要るんでしょう。まして薬剤師さん、それから事務員も要るんですね、夜中であってもですね。そういうことのための資料だということで説明があったんですね。これはそのときの議事録ですよ。これだけ、ここで論議しましたから。私はこの瞬間言ったのは、やっぱり人を助けるのは条例が先か、メスが先かと思ったんですよね。

全部紹介できませんので、当時を皆さん思い出してください。ここに伊藤部長の答弁があるんですね。質疑があって答弁ですね。先ほど医療統括監の170万円、これは院長さんの月収程度だ、こう言われたですね。そして、谷口議員の質問に対して、委託契約の前になぜ議会に説明しなかったかとのおしかりに対して、この件につきましては御指摘のとおりでございまして、私のほうも救急再開に向けて各分野ごといろいろ指導を受けました。つまり市長、考えていただきたいのは、伊藤部長が北方からですけれども、４月から病院に来たんですね。病院会計も難しい、お医者さんもそのころはおらんで、お医者さんも探さなきゃいけない。いろんな中ですよ。伊藤部長は、本人のためですけれども、２年前に合併して、水道が北方、武雄、山内ばらばらだった。それを２年間で一本化にして、そしてなおかつ、水道料金を下げられた方ですよ。私たち議員は、水道料金高かやっか、下げろでいいですけれども、現場は大変ですね。それを２年間でしてこられた人です。だから、少々のことではへこたれん人ですけれども、今言うように４月に入ってきて、私大変だったと思うんですよ。お医者さんはおらんわ、お医者さんば探さにゃいかん、救急医療はせにゃいかん。

それで、今言ったように――すみません。どこまで言ったですかね。だから、救急再開に向けて、あくまで今回の主眼につきましては、市長が先ほど言われるように、24時間すべての部門がまずもって病院に滞在しておかんばいかん。そして、即座に対応するということが基本ですよと言われているね。そのため、いろんな各分野ごとの研修を行って、そして８月11日に救急医療を再開したと。本当苦労があったと思うですよ。私たち議会というのは簡単に言えば済みますからね。「全員協議会なりを開いていただいて説明するのが基本だったというふうに思いますけれども、何分、救急再開に向けて病院内の職員、私を含めてばたばたと準備をした関係で、手順について不手際があったということはこの場をかりておわびします」と。これにすべてあらわれていると思うんです。今までの救急医療を引き継ぐのであれば簡単にできるかもわかりませんけれども、全く違うですもんね。人の命を預かりますから、

間違ったら大変なんですね。そういう論議があった。これはむしろ、私に言わせれば褒められるところだと思うんですけれども、そういうふうになってくるんですね。

だから、このことに対してぜひとも聞きたいんですけれども、私が言いたいのは、繰り返しますけれども、ちょっと時間が長くなりましたけれども、選挙はやっぱり政策対政策でなからんばいかんと。そして、先ほど言ったように政策が決まれば、決まったほうが民意の多数だということになりますから、それに従わなければならない。そして政策に協力していく。だから、自分たちは負託を受けているということが大事なんですね、市長ね。だから、どう言いますかね、アメリカの大統領選挙といいますか、政策論争しますね。しかし、決まれば一緒になるんですよね。そういう気持ちでなければ武雄市は発展しないと思いますね。政策を掲げ、戦い、もしその政策がうそであったら、みずからがやめなければならないような、政策を掲げ、戦い、当選しても、もしその政策がうそならば、みずからやめなければならないような、そんな風土づくりが絶対必要だと今度改めて思ったんですね。市長の見解を求めます。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

今回の選挙で民意が確定をした。これについて、私は何も民意を押しつけるつもりはありません、反対派の皆さんたちに。お互い民意に従うのが今回の選挙の有権者が求めるあり方だと。したがって、私に対して求められるのは、医師会と仲よくしなさいということが一定の民意だということを思っておりますので、早速、年明け早々行ってまいりました。古賀医師会長から温かいお言葉を賜った。これは、古賀医師会長もそれを十分御理解していただいたと思っておりますので、黒岩議員がおっしゃるとおり、アメリカのような、一たん民主党の政権になれば、共和党は特に金融対策について従うと公式のコメントをされておりますので、ぜひ武雄もそうなるように私自身も努力をしなければいけないと、このように考えております。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

本当繰り返しますけど、これは私、実は選挙戦の終盤に川良Ａコープ前ですよ、古庄候補が街頭演説されていたんですね。私そこに聞きに行きました。そしたら、ちょうど遅かったものですから、古庄候補が終わって、その後、石丸県議がマイクを握られたんですよ。それを最初から最後まで聞きました。そしたら、石丸県議は相手候補の悪口、つまり樋渡市長の悪口は一切言われませんでした。そして、武雄市は丸くならんばいかんと言われたんですよ。これは派閥をなくす意味だというふうに私とりますけど、武雄市は丸くならんばいかんと言

われた。ああ、やっぱりすばらしいなと。やはり県議会で推されて議長になられるだけあるなとつくづく思ったんですね。

それから、８月11日の先ほどの再開、これは慌て過ぎたかもしれん、いろんなことを言われるかもしれませんけど、実は８月23日、何が起こったか。北方の皆さんならわかりますけれども、私の同級生のお孫さんが交通事故に遭ったんですね。私もすぐ近くの仲間が脳挫傷で死にましたので、脳死状態が出るのは頭を打ってからわずか半日ですよ。外をしたら外にたんこぶが出ますけれども、頭蓋骨がありますので、脳をやったら半日ですよ。だから、はれどめをいかに注入するかで、８月23日、その子は助かったんですよ。だから、救急救命はこういう背景があるということを、市長は病院を預かる身ですから、ぜひとも覚えて考えていただきたいと思います。

それから、実はリコール運動はなかったんですけれども、リコール趣意書というのが新聞に入ったんですね。リコール趣意書は新聞折り込みになりましたので、私はその趣意書に反論ということで書きました。そしたら、なかなか今度は新聞に入らないんですね。11月21日に入りましたので、10日ぐらいかかりましたかね。それがこれなんですね。「地域医療を考える会」ということで、（資料を示す）発行者、黒岩幸生、ちゃんと地域医療を考える会として、意見、御要望があれば私の住所と電話番号です。前と後ろと書いています。これは出来レースではないということと、出来レースは地域審議会で貝原先生が、あれは法的に何ら問題ないですもんねとちゃんと言われているんです。それを余りにもひねられるから、これは違うんですよと書きました。それで、医師不足については先ほど言いましたように、２月12日から、備前市に行ってからずうっとそれを思っていましたので、その思いを書いております。私の言うとは違いましたからね。それに財政問題。この財政問題を書いたのは、相手候補というですか、相手の方がずうっと、つまり当初の計画どおりですと。一円の金も入れておりません。黒字になりよるです。これだけ３つつけ加えれば何ら問題ないように聞こえるんです。それで、それに対する反論を書きました。

そしたら、先ほど言いますように、私の名前を書いて、私の電話番号を書いた。これに対して文句をある議員が、事もあろうに松本元町長の奥さんに文句を言った人がいるんですね。名前出していいけど、出しません。出していいですよ、いつでもいいですから、責任を持ちますからね。何か――後でいいですよ。議事進行で後で行きましょうね。――やったんです。びっくりしましたね。そういう話を聞きました。それはいいです。

だから、（パネルを示す）この折れ線グラフとこれをどういうつもりで書いたかということで、小そうございますので、私もまねしてつくってきました。これは執行部からいただいた資料ですよ。これは病床利用率です。病床利用率、病院のベッドですね。これが一般病床ですよ。これが結核病床。これが古庄市長のときですけど、当時、６年たてば黒字になる。つまり85％はここですけれども、これを超えるんだと言われた、当時ですね。いいですか。

なぜ超えるか。今は44.8％ですもんね。だから、55％の空きベッドがあります。それは置いとって、太良は87.5％の利用率ですと。だから、うちも85％になりますよと、こうですよ。議事録を見てください。びっくりしますよ。立地条件も違うし、いろんなこと違うけど、85％になるんだと言われた。だから、黒字になるんだと。だから、当初言いましたように、北方、山内に急患センターは任せろという話になるんですね。しかし、一回も85％をオーバーしておりません、ということを書いたんですよ。

それと、これですけれども、医業損益ですね。俗に言う店の営業ですよ、建物じゃなくて。それが毎年、累積赤字が今現在12億円ですよと書いただけです。流れですね。それで、26億円の赤字、市長も26億円、これ一緒ですね。私は私の計算の仕方で書いたんですけれども、これは皆さんもらえる武雄市民病院事業会計決算書ですね。これと水道とか、いろいろ特別会計をここに持っておりますけれども、この中で、つまり病院会計、水道会計が難しいのは２階建てだからですね。営業と資本が違うと。それで、私はわかりやすくみんな一緒にしました。それで、平成11年から21年度まで、武雄市民病院事業財政状況見込みということですね。11年度いろいろ聞いて調べて、がらがらして、そして総歳入引く総歳出と償却資産なんです。これがマイナスの12億610万3,000円です。それと企業債残高が21年度末で10億6,700万円、20年度は11億4,800万円ですけれども、やっぱり21年度に合わせるために、21年度末の推定で10億6,700万円、それと退職金が21年度末で４億5,000万円、つまり12億円と10億円と４億円で26億円ですよという主張を私はした。私の主張ですよ。

それと、もう１つびっくりしたのはこれですね。つまり、12月20日にある新聞社さんが「運転資金には余裕も」と書いてあります。武雄市の病院が運転資金に余裕があるように私は思えませんでした。これは幸いか不幸かわかりませんけれども、正月過ぎてから見たんですね。今度の一般質問をどうしようかなということで見たんです。これが12月20日ですので、選挙前ですよね。これを知ったら私はばたついたと思いますけどね、幸い選挙が終わってからでした。

それで、これも調べてみました。これですね――ああ、違う。もう少し中身を言わにゃいかんですね。この新聞には、病院の経営安定にはすぐ支払いに回せる運転資金を手元に置いておくことも欠かせない。そのゆとりを示す指標が流動比率ですよ。06年度で武雄市民病院の流動比率は県内４番目の771％だったと書いてありますね。これでは、つまり健全経営と言われる200％――200％が健全経営ですかね――を大きく上回っており、直ちに資金に行き詰まる危険性はない。だから、運転資金には余裕もと書いてあるんですね。まさかと思ったんですね、武雄市民病院が。

それで、調べてみました。今言うように流動比率ですね。流動比率というのは、皆さん御案内でしょうけれども、傍聴者もおられますので、いいですか。１年以内に現金化できる資産と支払わなければならない負債とを比較するもの。資産と負債ですね。それで割ってみる

と、確かに18年度771.41％と書いてあるんですよ。だから、新聞に書かれたとおりですね。

しかし、さらに分析してみますと、ここですけれども、他会計長期借入金とありますね。これは運転資金なんですね。つまり、12年６月23日と12年６月30日に２億1,800万円借りて、このときで１億1,720万円の残があるんですよ。これは皆さん持っている資料ですよ。これを貸借対照表で見てみたら、この１億1,720万円は入っている。わかりますか。間違いですね。１億1,720万円に固定負債、長期借入金１億1,720万円と書いてある。おかしいですよね。監査委員さんおかしいですよね。おかしいでしょう。固定負債にはならんとですよね。１億1,720万円は流動負債でしょう。つまり、これが分母に来るんですよ。それで引き直してみたら218％ですよ。だから、どう考えても大町よりか落ちるですよね。大町は今ちょっと黒字と言いよるでしょう。そういう位置づけに武雄市はあるんですね。

そういうことですけれども、市長、話が少し横に行きましたけれども、26億円の赤字はうそだと言われたんですね。切り口はいろいろあると思います。私は総収入でしました。市長はどういう計算をされたのか、簡潔にお願いします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

26億円については、19年度末の段階で医業損失の累計、借入金の償還残額、そして移譲に伴う退職金を考えた場合には26億円という計算で、私どももそのように考えております。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

じゃあ、一緒の切り込みでよかですね。切り込み方はですね。

だから、当初言いましたように、いろんな情報、どの情報を信じていいかわからんということでございましたので、そのことについてもやっぱりちゃんと市民にわかるように、わかりやすいようにぜひとも説明していただいて、病院はどのような状態だったのかということもぜひ必要だと思うんですね。

私、３月定例議会に申し上げたと思いますけれども、高浜病院を覚えてありますか。あそこは医業収益が106ですよね。106であったけれども、結局は医師不足でどうしようもない。平野議員と少しやりとりがありましたけどね。しかし、どうしようもないということで、結果的に今は民営化しましたね。トヨタの傘下に入りました。大分条件は悪いですよ。20億円払って、毎年払わんばごとですね。あれだけいい病院がそんなになるのかなという状況ですね。だから、そのことも終わったからじゃなくて、やはりちゃんと選挙の総括をしていただきたいと思うんですね。

それで、いよいよとは言いませんけれども、これからの池友会との課題ですね。もし決まれば、移譲に向けていくかわかりませんが、５月30日やったですか、７月16日、そういうことで行きますので、民意を得ましたのでですね。

しかし、今度逆に行く前に非常に考えなきゃならん。移譲に対して非常に注意しなければならない。ここにテープもありますけど、いかに市長が池友会、あるいはほかのところに対してちゃんと市民を守ってくれるか、それなんですね。つまり、相手に対して強制力を持てるのか、相手の言いなりになるんじゃないか。まず、基本的な一言ですけれども、相手の言いなりになるのではないかという不安が非常にありますので、まず最初、その一言の決意を述べていただきたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

言いなりにはなり得ません。池友会が求める市民医療と私どもが考える市民医療というのは、ちょっとまだすり合わせが必要な部分がありますけれども、大まか一緒でありますので、そういった意味での議員おっしゃるようなことにはならないと、そのように思っております。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、相手は市長ね、民間になるわけですから、思いだけでは勝てないんですね。強制力を持たなければならないんですよ、何かをですね。

それはそれとして、１月７日、「病院移譲歩み寄り」と、これは新聞ですね。これには、樋渡市長と武雄杵島地区医師会の古賀義行会長が会談し、関係修復に向けて動き出したと、もう本当拍手を送りたいような新聞記事でございました。関係修復に向けて動き出したということですね。会談は、市民医療確保のため――これですよね。医師会の人が思われるのも、反対派が思われるのも、みんな思うのは市民医療の確保、これ一致すると思うんですね。市民医療確保のため、地元医師会との関係修復が急務ということで市長が申し入れられたというんですね。それは当初言われたとおりですね。

それで、市と医師会が連携して市民のために関係を再構築したい。これに対して古賀会長さんは、民間移譲についてはある程度の民意が得られたと思う。今後は、移譲先の病院がどういう形態で運営されるかなど、市として移譲後の具体的なものを示してほしい。協議会については、移譲後の最終条件をつけるのは市である。ここのところが大事なんですね。移譲後の最終条件をつけるのは市であり、医師会はアドバイスやいろんな要望を出せるが、協議会でするかどうか検討する。ここですね。それから、さらに会談後に記者会見した古賀会長は、協議会には池友会と市がどういう提案をし、実現の保障を聞いた上で――ここなんです

よ。実現の保障、つまりそれがなければ、先ほど言った強制力をきかせ得るだけの力がなければ、幾ら医師会が話しても、市長がそうなければ医師会のほうは空念仏に終わるわけですから、絶対それはさせてはならないところなんですね。だから、市長がちゃんと池友会に対して、当初言われましたように、強制力をかけてやっていくんだというスタイルが見えれば、医師会もちゃんと乗りますよということですので、ぜひともそれは向かっていかなきゃならないと思うんですね。

私は、和白と最初聞いたとき、インターネットで引いたんですよ。そしたら、反対派の皆さんとは全然違って、ネットで出てきたのは、24時間365日患者様の受け入れ拒否をしませんよ、それが最初に出てきた。事務局の人に引いてもらったら、24時間365日患者様の受け入れ拒否をしませんよと。今でこそ、武雄市議会でこれだけ話になりますけど、最初これを見たとき、もうすばらしかにゃと思った。これは今まで議会の中でも話しましたけれども、私のすぐ近くの人ですね、大やけどで結局亡くなられたんですよ。下半身が燃えて、骨が見えていた。しかし、その救急車を２時間どこも受け入れてくれなかったんですよ。現場から離れられなかった。本人も痛かったろうし、救急隊の方も痛かったろうし、家族の方も近所の人もみんな心配したけど、救急車を受け入れてくれなかった。武雄市の病院も市民病院も受け付けてくれなかった。２時間ですよ。結局、県立、それから久留米のほうに行かれて、最終的には亡くなられましたけどね。１分１秒早く患者様を引き取って、今、ＥＲ病院がはやりですけどね。そして第１次治療をしてやる。だから、絶対救急医療は必要だとこのとき思ったんですね。そのときに24時間365日患者様の受け入れ拒否をしないと書いてあり、私はもうここだと思ったんですよ。

私の孫も前に言いましたように、きょう笑って手を振りました。順調に回復しています。きのう、うちの娘婿に聞いたら、個人的ですけれども、生まれてきたときもう真っ黒だったと。死んでいると思ったと。それが今元気になっているんですから、救急医療のありがたさですよね。

しかし、私はそうですけれども、先ほど言いましたように、多くの市民の皆さんはやっぱり巨大医療機関といいますかね、何で武雄市に来っとやと、何でんかんでんおっとらるっとやなかやと、そういう不安はかなりあられると思うんですよ。それが実態だと思います。本当に私たちの気持ちも守ってくれるのか。だから市長、ここのところだけは市長と一緒の考えと思いますけれども、池友会あっての武雄市じゃないんですね。武雄市民あっての池友会、武雄市民あっての医師会、もちろん武雄市民あっての議会と思っております。ぜひとも武雄市民あっての市長だということで守っていただきたい。

そこで、高浜病院、先ほど言いました。調べてみたんですね。トヨタに市長は理事として入っているんですよ。なお、職員も何人か派遣するという話も聞きますね。だから、トヨタグループの中に高浜病院を民間移譲したんですけれども、少なくとも契約の中に市長さんは

理事として入られてある。私の友人の松尾初秋議員が言われたことは、例えば、市民病院を今度売却するんですから、その金を一時預けてでも、共同経営というわけじゃないですけれども、そういうふうな形はどうかと。そういう強力な担保をしなければ、相手は6,500を有する大医療法人ですよね。好き勝手にされるんじゃないか、不安ですよ。ぜひともそこら辺の方策も考えられないのか、お伺いをいたします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

先ほど黒岩議員から高浜病院の例が出ました。私が知っているところでは、私が前におりました高槻市、これは三島の救急救命センターがあります。これは高槻市長が理事長として、あるいは理事として、ちょっとどっちか記憶に定かではありませんけれども、市長みずからが派遣をされて議決権を有する理事ということで入っておられます。

それとあわせて全国の多くの例で、職員を派遣する、あるいは交流をするといったことからすると、議員がおっしゃったことについて、市民の皆様の合意、議会の同意、そして、これが武雄市民の医療福祉の維持向上につながるということになれば、私は池友会に提案をしていきたいと、このように考えております。何よりも大切なのは、ガラス張りだということであります。皆さんに入っていただいて、市民医療をきちんとしていくためにどういうことができるか。そういうガラス張りの場をきちんとつくっていくことがあわせて重要だというふうに認識をしております。そういう意味では議員の認識と同一であります。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今、最後におっしゃいました。市長ね、ガラス張りにさせることが結局は我々の民意を反映させる。つまり、我々でコントロールできるようになるんですよ。隠してしまわれればどうしても力が及ばないということで、中身を知らせていただくということが一番大事なことなんですね。

ここに１枚のテープがありますけれども、あるテレビ局のあれですね。これを診療所で繰り返し繰り返し流された。私これを見て、本当、蒲池統括監に憤りを感じたんですよ。それはテレビ、いろんなものは前後ありますからね。前後あって追い込まれたかもしれませんけど、どんな状態であっても、こんな言葉を吐いてほしくない。先ほど言いましたように、自分のまちだというふうな言い方ですよね。どんな状況であっても、6,500のスタッフを有するような企業ですね。絶対言ってほしくない。ただ、これによってやっぱり市長は本当にやれるのかと、この巨大医療産業みたいな医療機関を市長はコントロールできるのかという不安がいっぱいあるんですよ。だから、市長だけでせずにガラス張りにオープンにさせれば、

またみんなして頑張りましょう。ぜひともそれが必要。

これを何で思うかといいますと、実はこれも何遍でも申しますけれども、谷口議員と松尾議員と私で沖縄の中頭病院に行ってきたんですね。４月ですよ。そのときは既にあそこは病診連携、病病連携、病施設連携、すべてを地域連携として、地域支援病院として上手に回されていた。何でここに行ったかといいますと、繰り返しますが、日本全国で研修医が一番よく集まるところなんですね。当時、私たちは医師不足を感じておりました。そこで、３人して行きました。向こうが言うには、行政から来たのは私たちが初めてだと言われましたけどね。そこで覚えてきたのは、やっぱりちゃんとした地域連携ですね。だから、それは行政が横におってちゃんと見ておかなければコントロールできないと思うんですね。

ここに「医療ルネッサンス」ということで中頭病院のことを書いてあったんですね。沖縄本土の中部にある中頭病院、ここに行ってきたんですけど、ここは表題にありますように、ＥＲでまず受け入れと。ＥＲですね。つまり、救急治療室というですかね。つまり、24時間365日患者様の受け入れ拒否をしないという宣言のところです。今これがふえつつあります。さきの９月議会で言いましたように、今、日本全国に150ですね。聞くところによりますと、池友会もこれを目指すという話を聞きますけどね、空念仏でないようにお願いしたいんですね。

これは沖縄でですけれども、ある人が交通事故に遭って肝臓に出血したと。１分１秒を争うんですね。しかし、救急車を呼んでから着くまで13分、遅ければ危なかったという話ね。先ほどの８月23日の北方の人もいち早く手当てができた。それが健康につながったと思うんですね。事務長が前、私に個人的に言ったことは、市民病院の前のある方が、市民病院を救急車が通り越えて白石に行ったんですね。この方は亡くなられました。そのとき言われたことは、あと30分早ければと言われたんですね。伊藤事務長は、目の前を救急車が通り過ぎるのは涙が出たというんですね。亡くなられたということじゃなくてですね。それますけど、だからＥＲ、すべての患者さんを24時間受け入れる、これが大事なんですね。

そして、そこで受けて、ここにも書いてありますけれども、必要があれば専門の診療科に引き継ぐと。沖縄でも行ったときに、地域連携室ということでいろいろ情報公開してありました。こことうちは一緒にしていますよということですね。何々郡と書いてあったか、ちょっと忘れましたけどね。大きな固まりでつくってされているんですね。だから、ここも救急隊からの依頼に対して99.3％が最初の時点で受け入れたと。

この前、テレビでＮＩＣＵですか、新生児が出ていたですね。これは今、全国で3,000床要るけど、2,000床しかないと。1,000床足らない。10年から20年かかると。今まで政府は何していたのかという話がありますけれども、それが臨床研修制度に変わりますけどね。ここは99.3％受け入れしたと。

これも前、谷口議員がおっしゃったことですけれども、救急医療に当たることは医師とし

ての基本、同病院は救急を学びたい意欲のある医師が集まる。前、谷口議員が言われたですね。救急病院のなかぎ医者も来んとよと言われました。このことですね。内科、外科でなく、産科、小児科などＥＲ病院に備えていると。だから、これがスタイルなんですね。地域医療、また後で言いますけれども、このスタイルをぜひとも池友会にＥＲ病院を目指せというふうに言ってほしいと思いますけれども、いかがでしょうか、お伺いします。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

ＥＲ病院の手続については進めておるというふうに私も認識をしておりますので、目指す方向は一緒だと。そういう意味で、先ほど議員がおっしゃったのは、いわゆる鹿屋方式と言われるようであります。そういった意味で、中頭病院を範として、鹿屋方式として今全国に広まりつつある。それが恐らく市民、県民の皆さんたちが望んでおる姿だと思いますので、私どもも一生懸命勉強した上で提言をまたしていきたいと、このように考えております。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

地域支援病院を目指すのかという考えですね、市長ね。だから、ＥＲを目指せば当然地域支援も目指していくと思うんです。地域支援病院になるためには一定の紹介率ということがありますけれども、それを目指してやるんだということこそ大事だと思うんですね。地域医療支援病院というのは、せっかく傍聴者も来ておられますので、また武雄市民の皆さんのためにも、今後問題になっていくことだと思いますので、かいつまんで言いますけれども、地域医療支援病院とは、高度な救急医療や専門医療などを中心とした医療の提供、当該病院の病床や高度医療機器等の地域のかかりつけ医への開放、患者の紹介、逆紹介を通じての共同診療などにより、かかりつけ医を支援し――ここですね――かかりつけ医を支援し、２次医療圏単位での地域完結型医療の充実を図るために設けられた病院が地域医療支援病院ですということですね。これには義務がついておるんですね。これは佐賀県の分ですけど、業務報告ですけどね。

地域医療支援病院の役割とは、他の医療機関から紹介された患者に対する医療の提供、共同利用の実施、つまり開放型病床、開放型治療もいいますね。それに高度医療機器など、お互い開放型でやっていくんだと。24時間体制での救急医療の提供、これは先ほどのとですね。それから、地域の医療従事者に対する研修の実施、そして、これは業務報告が義務づけられるんですね。だから、これを目指すということでかなりの相手の誠意もわかりますし、そしてまた、我々のコントロールもきいていくと思うんですね。

そして、これも抜粋ですけれども、病診連携のメリットですね。診療所から見たメリット、

面識のない先生に気軽に紹介できる、病院を紹介できますからね。それと、自分の専門外の領域でも心強く対応できる。かかりつけ医として、これは不得手だなと思っても、ちゃんといるからということで窓口ができるということですね。さらには、紹介した患者さんの情報が確実にフィードバックされる、情報がちゃんと共有されるんですね。それから、自院に、その診療所に高額な先端医療機器があるような感覚で――なくてもですね――あるような感覚でＭＲＩやＣＴが利用できる。和白はＰＥＴがあるんですね。ＰＥＴ、５ミリ以上のがんがあれば、糖分と絡んでどこにあっても見えるやつがですね。ＰＥＴなんかを病院で買えば、病院は倒れるらしいですね。しかし、ＰＥＴもあります。そういうのを自分の病院みたいに利用できるというメリットがあるんですね。

それで、ぜひともそういうふうに目指すということでしますけれども、当初言いましたように、こういう話をしても、市長が池友会に対してちゃんとした強制力、わがままさせない、好き勝手はさせない、ちゃんと行政が上だと。上だというのはおかしいですけれども、市民のために、市民が一番上だと。市民のため、行政が強制力を発揮するんだということは今後の課題になりますからね。我々も一生懸命それに対しては後押しします。そして、すばらしい医療のまち武雄市をつくりたいと思って、この質問に対してはこれで終わります。

次に、まちづくりについてでございますけれども、道路問題について取り上げたいと思います。

まず、今、北方にとってはどういう状態であるかといいますと、武雄市からは余り今まで考えなかったかもしれませんけれども、９月議会、６月議会だったですかね――に提案したとおり、まず34号線が非常に交通渋滞であるというのが第１番目です。

もう１つは、県道北方朝日線、つまり、川上からドライブイン鳥のところの34号線の三差路が鋭角なため、非常に朝夕ラッシュが激しい。これを何とか解消してほしいということで、実はこの前、９月議会でもお願いしたところですね。少し北方を忘れているんじゃないかと、合併前とは違うじゃないかという話をしましたね。それで、ドライブイン鳥の三差路については、この前から言いましたように、別の路線を後ろのほうに鋭角を変えていくという考え方をしなきゃならない。それまでこの前、９月のときはもらったんですね。

そしてさらには、北方にとってみたら、さらにそれをこの前、久津具のほうに行ったときに言われました。市長もちょうど言われたと思いますけれども、それを通して現在買収してあるんですね。少なくともそれだけは交通利用できるように、道路として利用できるようにしてほしいという話が出ましたね。

さらには、武雄と江北のバイパス、これをつながなければ、大町、北方、今大変な状態ですね。佐賀から帰ってくるときに江北まではすぐ来ますけれども、大町に入ったら途端に動かんと。だから、このことについては、以前に実は松本町長と一緒に北方におるときには一生懸命陣内先生にお願いをして、何とか路線までになっていたんですね。それで説明をして

いたんですけど、実はきのう市長から、古賀誠先生に陳情に行くので、よかったら来んかということでございましたので、私もついていきました。柳川のほうで古賀誠先生にお会いして、私初めてですからね。しかし、私も遠慮することないですから、ここ困っておりますと言いました。そしたら、六角川のあの難しさ、それから線路が近い、やっぱりよく知っておられたですね。大変なところですもんね、ここと言われました。そして、やっぱり知っておられるなと思いますけれども、私は私で無理言いまして、非常に感触はよかったような気がするんですけれども、そこら辺について市長のほうからぜひとも答弁をお願いいたしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

昨日は古賀誠自民党道路制度会長のもとに、私だけでは非力でございますので、県議会の関係の方、そして黒岩議員とともに参った次第であります。よくもまあ、お忙しい古賀代議士があれだけ時間をとっていただいたなということについて深く感謝を申し上げますとともに、きょう実は朝、秘書さんから私のほうに電話がありました。早く国土交通省にきちんと言ってくれということを言われましたので、ちょっと議会中でありますけれども、日程をちょっと調整いたしまして、私みずから国交省の道路局長のところに行きたいというふうに思っております。いずれにいたしましても、道路を一番よく知る自民党の代議士の方が、ここは本当に厳しいんだなと、厳しいねということをおっしゃっていただいたことについては意を強くいたしましたのと同時に、きのう黒岩議員からるる地域の本当に困ったという言葉を代議士にもう臆することなくおっしゃっていただいた。これがやはり政治の力なんだなということを私自身学んだところであります。

以上です。

○議長（杉原豊喜君）

29番黒岩議員

○29番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今の道路、34号線、つまり武雄の方は余り御存じないか知りませんけれども、江北から武雄までの難しさ、一番近いところが佐賀鉄工のところですかね。道路幅がとれない。そういう状況で、六角川を一回越えれば、何回でも越えなければならないような蛇行した六角川ですね。かてて加えて軟弱地盤なんですね。今、江北から眺めてみますと、江北でまず線路を１回渡った。そして、江北で２回渡っているんですね。しかし、どうしても武雄とつなぐためにはもう１回渡らなければ連結しないんですね。

それで、非常に陣内先生と行ったときにも路線的に困ったと。むしろ地元のほうがどうするのかと言われているようなところなんですね、あの場所は。しかし、そういう中から先日、

部長さんの力で考え方、あるいは北方の考え方で一つの路線が、モデルケースですけれども、でき上がりつつあるんですね。だから、そのことで我々もできることは押していきますけれども、部長としても現場の立場で、先ほど言いましたように、水道料を安うなせで済みます、道はつくれで済みます。しかし、そうじゃなくて、我々も現場に立って一緒になって頑張っていきたいと思います。

それはなぜかといいますと、今度予定は23年ですかね。北方の宮裾のほうの工業団地ですね。これに直ちに企業が張りつけば、途端にドライブインふちがみのところは今の状態ではパンクですよ。大型車が来たら、とてもじゃないけど動けない。そういう状況は何回も見ていただいて、非常に苦しい状態はわかっておられると思いますけれども、先ほど言いました34号線の悩み、バイパスの悩み、それと鳥の悩み、今まで長年かかって何とか日の目が見れそうで、なかなか見えなかったところでございますので、より以上に難しいということを肝に銘じていただいて、ぜひとも武雄市の北方ということで力を入れてほしいということをお願い申し上げまして、私の一般質問を終わります。

以上です。どうもありがとうございました。